今古
談
叢聖話
壹

特へ13
門
16441
巻 3

饗庭文庫

古今奇談繁野話第二巻

㊄ 白菊の方猿掛の岩と怪骨を射る話

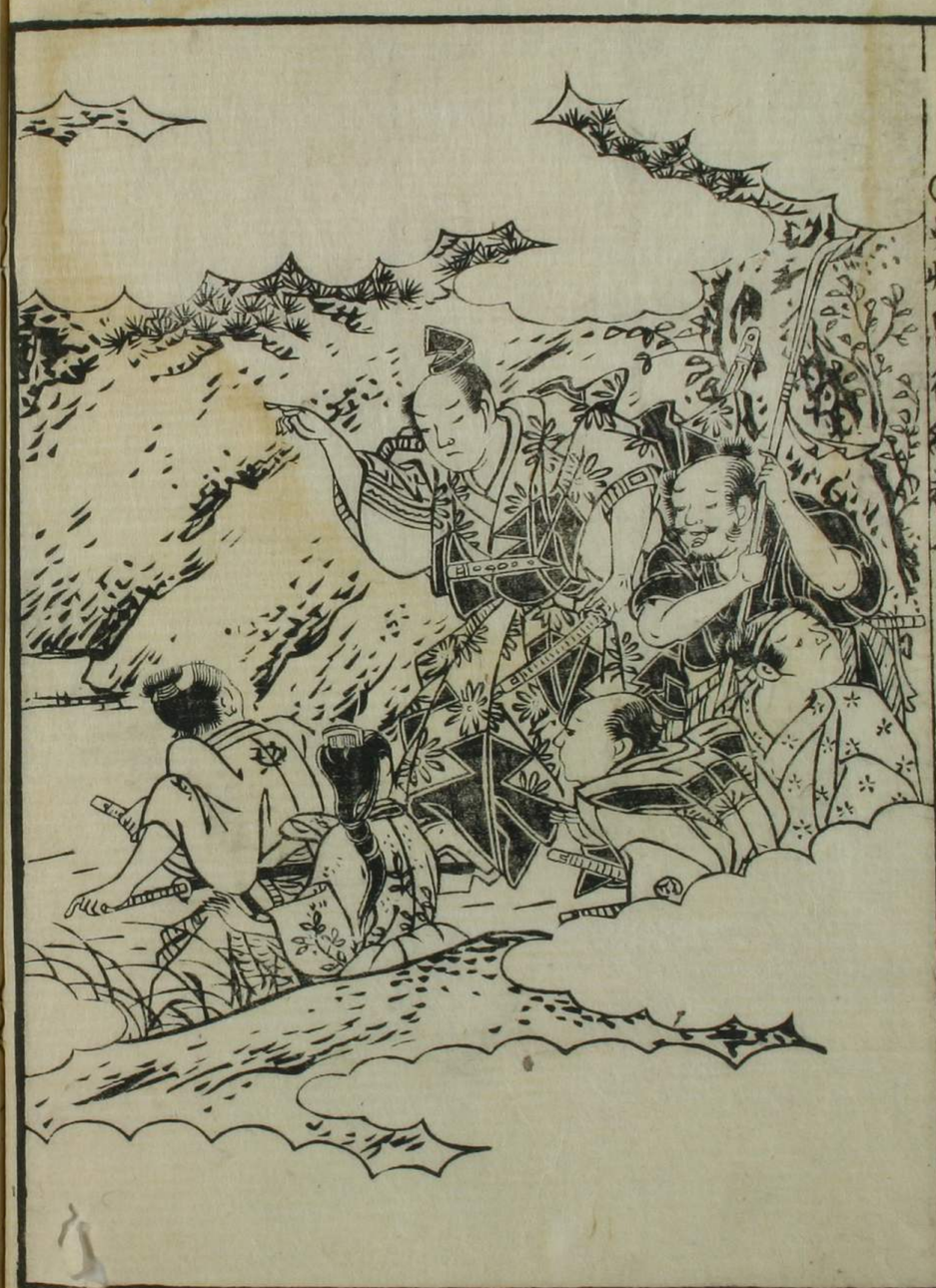
古人云。鬼神と山魅の類と幽現の別あり。山魅本客岡兩猿狐乃類い皆形體あるのゆゑ時ありて形を隱し時ありて形を現ず。是ゆゑに靈明を使ふ巧拙の分あり。巧なるは物を役使し人の魂を發さし拙きは靈を役して人を役する。鬼は人沒して土中に埋のゆゑ骨肉は土と屬し其氣は發揚して空にある成鬼の神となり。體なく變なし。是も尚異常あり。老るゆゑ祭まで隆く嚮祭る人の心と交て近づいて其跡なし。異なるゆゑ人に托して語て人に附て靈なりとしむ。形體なくして死人なる形なく身は然なく靈を示すばかりなり。人のあふをゆゑ亦恐なるゆゑ假鬼の虎に使ふ。狗神の人のあふ含る類あり。凡そ生る人五に種この有情のゆゑ皆神ありてゆゑに附き人に托し。

るふ所鬼の神ようも靈なる所身を先ふ人のあを後と
を見せ者の天情ようて世の人多く免まじ故ようと自身に其神
の通ずる所ひろけども。他人に知ようと及ばざるなり。上古山川草木ま
ざ朋朋ぞ人語も密なるべ。山魅の類人ようと近く祇を犯じて人間ようと来
て交る。人皆山魅の為而を知る。後世人民繁息し。山を開き海と
築て其食を見し。陰を通し水を引て其運轉ようたるうす。人紛れ変自
ら蹊を求し。地平らかなれば人あり集りて居る。龍蛇猛狼恐れて
人ようと遠ざかる。山魅岡両尤も靈なれば多く深く匿て人間ようと
近ぶず。後の人多く因ようて鬼と魅ようあるうと云ようと混
じて一とし。又古への怪事を伝て。今ようざるを以て疑を抱くもあり。
古へようと今ようとを合て今もあるうて理を誣るもあり。又古へのよ
い今もあり。今なれのよい古へもるしと云い時変を云ざる原

虫の見なり。毛孔の文なれば人天然ようと近く間長生もあり求めずしてよく
和知し。巣居穴居を云う穴居あを云る。深山大澤何の怪らしきを人。昔
東国ようと住来る高客。木曾の妻龍と云人所ようと脚を傷り数日滞留。
寒暑に昊国も長夜に詩ようと尽。地名麁絹も計ようしるる所柄甚里ようと
祖上ようと久しく住る老人座ようありて云ぶ不を妻龍と名づ云ぶ
いとれある中ようと老が先人ども。ひろ伝へる長絹の伝ようて。田舎人の口銭く
流り出せる事怪しくぞ思ひ。誠ようと事の妖霧ようて多て奇異
家の涼ようと見ようと自ら朋の話ようあるぞ。清和天皇の時。美濃守源朝臣
頼を信濃守ようと特任せ。ようてあり。其時伐中れ國空屋大領ら骨。と
須守廉。権門の次撃ようりて信濃縁ようなりて。國なる妻女を催し登
せざるべき家人等を召具して東国に路ようと赴き。日数歴て苑原と信
濃に界なる岐蘇の深坂ようりぬ。笹原多く紛ようと霧けくて陰き路

又歩行をはこび人馬共に疲労を除るむつかしく信法と
通路不便なるを文武の府波無山道を開き山石を碎き樣を
し。當時何年に成べども路定まらずえう此山中烟瘴深く妖怪出
没し。往来多かべく人を狂惑甚だ甚恐るべき山中に人跡
らざる所多し。ひとこの狂ふを狩と名とり人頭あり後世其祀さるべ
ど其懐より一つの洞あり陰と称し岩窟とも石窟とも名あり
格定あかず。数十年の内多くあり。洞の中に宮殿方丈なること
とあり。山下の人ひとり入る者なそ。往往狐狸多い早く其所を去り去る。若
ためらひて之をとらんとすれば忽ち空より大石落ちり粉碎とする。此
洞ふ一つの怪物あり。ある時一片の雲となりて飛行をなす人ありまを
つけて飛雲となり其中は猩猩の精あり。神代よりこれを祈
通廣大変化きわまりなし。朝夕ごとに物を供して山海の珍味人を

ど欲しきものを振て偷るなり。時々人をとぶらひ宴席
かせども。仏神もこれを制することあたはず。飛ぶ鳥も飛ばざれば
よ能されば云ど陰陽採補の術をなして長生れる成妹を。近国諸山
の妖怪山精化これが部下となる。猛獣を使ひ耳報の術をなす。
洞の中より指かゞ百里四方の動静を吟味して考上聞の如し。
こに一日西南の方より一行の旅人あり。其中に一乃
張輿あり。飛雲古狐狐素をなして輿の内に居き婦人あり。容貌閑雅
よあてる顔花のごとくなれば。其美千と推察なして既に十六
家にて夫婦なりけれ。今年二十三歳にいまだ子なし。酒
宴の興を添へと。即時に山神に命じて往還の路上に一つの旅館を
紀現せ。夜ふかに宿驛なりけ。かゞ宿々べ。泊和らかして
女を攝て洞に入るなり。山神承て結構を成し白日を暗夜とす。



守廉山路に倦たれて日も暮なんとする頃宿の老翁に伝て休息に庵雲宿の老翁に出て物語しさ翁今年八十餘歳耳いれのうへ家落のうへも
実に稀なる物語の用ふ立ぬ程なれども庵のあるじ人ぎ幸ありてあまたの孫ありて
向へ山に伐採く盗賊狼の害多し奥せんとする女房の世方へ山賊の許
より毎年毎に向へ出て多人数を以て追こしを人世方実用
よりて女を奪ふる山賊のあるを知せんとて守廉冷笑て申れ
なれども弓矢本末を知り李国うそ武きの扶数を拵まとる物
いたれまで山賊を用ふべき珠を天聽の命を蒙て国の鎮として
我等事の所れ老業若堂に一人面白の家のみなりと勢ほとき
詞を亭主も其席を追め若堂親人の端に附。使女の宴に服の乃
附め守廉の妻の白菊と面の間に宿て山中の移なる家のさま

ぼろ〳〵寝物ぐろうして笑ひ興ぞる所をさそふ〳〵ぐ〳〵に眠きざしを
ぐ〳〵とぶ〳〵ど寝ふりをきそうれ風の音ふ同伐兵し傍を見れば早く女房を
見て清則うを出ん〳〵と戸ざ〳〵のあうをめぐせばいろ〳〵家と見
〳〵きあ〳〵なく〳〵と〳〵〳〵の立本の隅使女家人多も皆者乃
上にまろび伏りぐ〳〵あるを度〳〵と者をようひおてせば家のみらもて
じめて心はれ家後をとれば一つの民家もなく門光のうふてし
きを寄れ鐘聲を聞べいまぐ初るなり守ど義の広地しぐ〳〵る
妖怪のたぐ〳〵のて旅宿を彼よ況て女房を奪ひ引し山賊などて
りの所あるうと忙き速〳〵ども今〳〵ん世。樹下よ蔭をたのだて其東と
あ〳〵民家ある所を立りぐうて人馬をとぐ。家人を東西へ分ちやうさ
ぐ〳〵ども何を見出〳〵るとも〳〵ぐ〳〵山中をそへのるるる人間ふ美
のうとたて守け奥屋のたへ勿論女房を妖怪をとられ李国の一門よ

何の面目ありて再命をぶきとぶ狂しきをふ懐まどもぐるる分ま
あり怠漫しがてらと。其所を発して國れ府まいろう。國司ま謁をれ
ま前の様ま代りて幸ま国の旧き侍て猿まるれ憂こ身のうへとのう。
所勢を国まあるへ人をれ。りどは人ま対面なしがれ病ありと投医。
し絵まるる侍まそ。公服の家のまる三人を泛へ。女房の生死と見面どんで
やしべうどと。猟をるのまなして。彼男の親所をまかこるかれ所まど
探ま逢ふ。白菊の方へ変れま擾ま洞のうちまいまうてもたづへれども
ふつざうしれ人こちにきて。抜い鬼の洞まうちせこれるまこと
び胸つぶれそ涙湧て流る。係国まえめどし性産をこれば媚りは
女房数人も伏侍て大勢よこ。ふしくて新赤く鼻尖ま。舟れけ二丈
どろ門の仁まのどれが。後の衣服ま彼とまま性内をゆるれ出そ白菊
の傍まむれ近づき。縁あんどちをいかもむへほまは洞のうち別

にての世界ま。そこに来る姫女いま手を捜ても新色かりこれ。ぱ分と
なげきれをて我まよくまこし長生を楽めと。れとうて細やう
まなれど国まえぬ鬼のうちなくそろふまるかるまはるうろ。
数にまくは変れま白ひ自はさうくけ不の楽これ死ず迷まれ
ぜんこれ会ど。性乃の振色あうば古れ答てもれをどきてうげしき
詞ハ悪はしかん。白き耳根まの黒き髪のこはまうろ。泣低し新
乃紀粧の泪まの洗ひれるさ。悩る西施泣る虞氏昭君出塞憂
容楊妃馬嵬の愁眉もかくやと。ふまはこれ天然の國色。色ませま
び身をる失ちまんと。女房等まあやせ誘なたけちめんこれ多の女房
いで来ういざこて性憂まりんこれ。白菊是を拒こそ我家人の妻と
して由なれ所の性門まへ入ふべかりどと。勢これにひ性ふ捜て動ず

花雲矣て生人を熟言べくんば我が小宮に一睡して石枕の夢と息
んあるべき物ぬ女房の中に世花阿弥ちうくようて白菊のこゝ
ろまうなぐあさるべくよをめ〳〵こゝら〳〵断なるうへ出くるゝこゝ淫
なれとゝろ。若より車きの彩棺ゝていかりとさげどゝてるどゝ。
ゆ紙くも皆厭ぬ中をさめまこゝろこゝ紙来て逃まを出んとゝる
て歳度なれどゝ中の方格ゝ紙ど。紙〳〵て住回の路へすゝ通ゝ
出ることあさゝび蹴ゝゝ美の春紙ゝゝ。ゝ月の今変化を初て人
ゝるゝひのどゝかゝるむくにけき貌ゝあゝずもゝえゝゝ女ゝ男冥
醜を端どべきあふあゝず。ゝ変化里ゝ出そ整ゝ府ゝ其さ友優ゝ
きく国司の形粧をなゝ。其人柄をゞれてゝるゝ。ゝあ紙ゞゝそゝゝう
にゝどゝて泛ゝんや朔夕ゝ別まゞゝてあ紙彼ゝゝゝ泛ゝゝ彼ゝまゝき
ゝを用てめゝみあゝれむ。されどゝまれ〳〵ゝがめきも死ゝべき命を

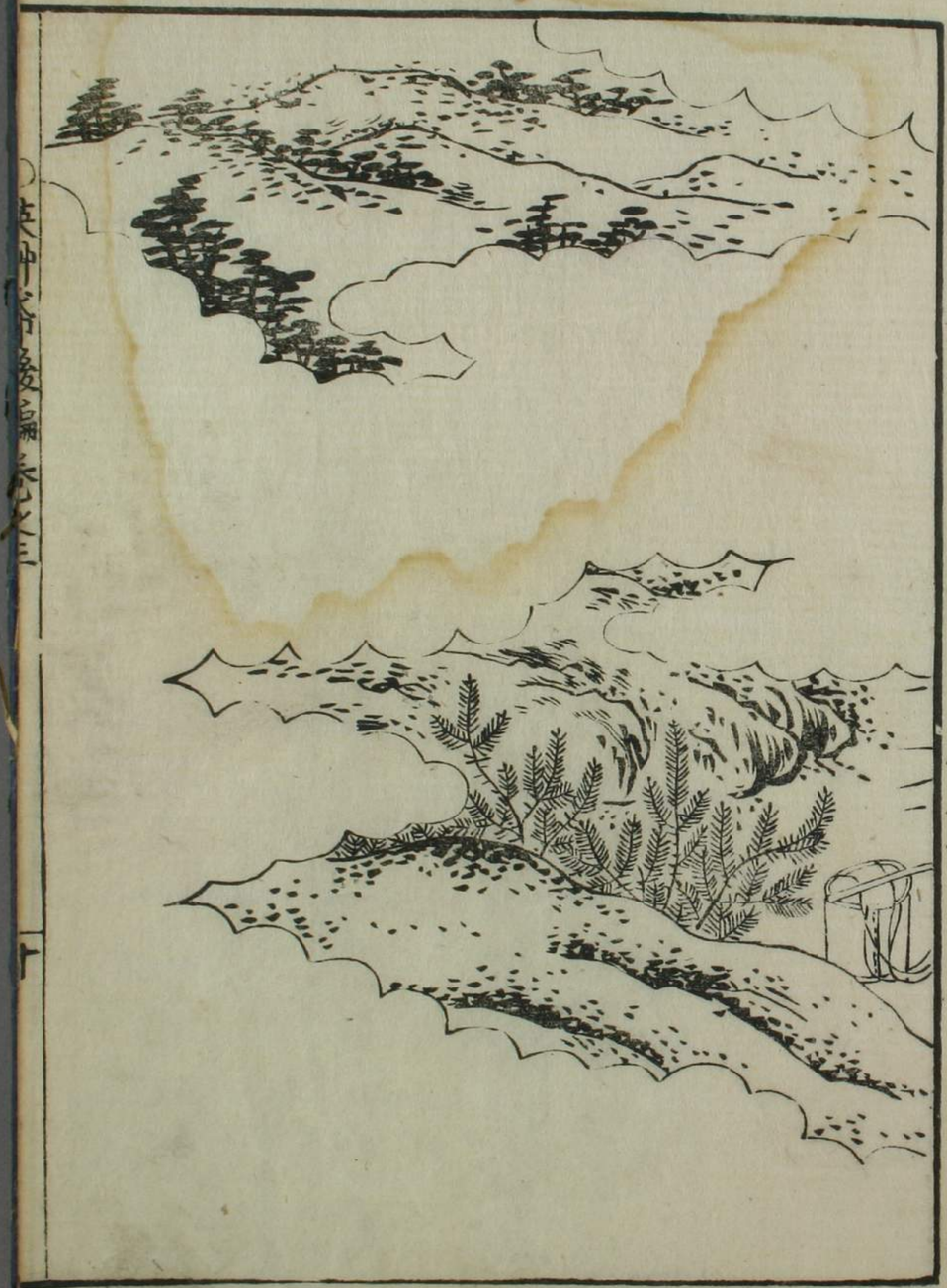
ぬをみゝいなれ生成むさゞりゝゝるる風のゝを水ゝ吹き。水の海ゝ
波を海と待身ゝゝなゝるぬ。ゝ紙ゝゝ若紙あゝ人ゝゝく懲ゝゝ。
遂ゝ妖術ゝ惑ゝ誘ゝゝんきゝゝゝ早く泛ゝを抜ゝゝゝゝ
と和ゝふをもゝど白菊答ゝゝゝ紙ゝ。女房ども詞にきて。並
の人心ゝゝあゝずゝゝきゝめ。花雲今ゝ大ゝいゝて。白菊を下ゝゝ
ゝ。洞の中ゝ用水を遠きゝ汲ゝゝゝ。衣服を洗ゝ嫁の役をゝさ
ゝむ。白菊都てゝをゝゝゝ行ゝき素ゝゝゝ。ゝ若ゝゝて水ゝ汲
ゝ衣をあゝゝゝいゝゝき紫をかゝゝ。身を汚をゝゝはゝゝぬと
心ゝ思ゝて故ゝの土神を祈ゝ再び家ゝ帰ゝゝゝゝゝゝ日ゝ
なゝゝき。洞の中ゝ教ゝゝ（祈ゝ。月の変ゝき紙月のゝゝゝ。三月
半の後花雲共客迎の若ゝゝ裏ゝ紙虚ひ出ゝ。ゝ嫁姫
をゝゝて独を表ゝむ。一日南廂ゝ宴を設けゝゝ紙寿花白

菊を酌に遊しむ。窈窕の緑樹山花梁瀬呉の竹など宴に侍る
其余の女絲に弾ひ竹に歌ひ興ある席に白菜ささうに眠を
催をうへ変化が女ども桐押て戯るを。目の不祥を度とし
術につき。酌をくみながらねぶりし狂ひて酒をこぼすも志らず。飛
雲なるわく罵て拳をあげ撲んとせしが。此罪科に山座より東
に谷二つあるさの瀧を汲て来ましとありぬ。白菜へ宗雲もあや
まちせりと身の罪を志り。桶を肩にして蹊をめぐり谷に沿ひ。
ちりや喇ふ躍てと云へども世なるでもあらせあるを。命ごそおかと成
就をる権なり。変化が今角を女房として勝人かれども手経るをる
しなりんぐらひ死ん命をすぎて死かれ人の果をとみそ何とてを
ぶ見なるのみぬきざるの淀める。二つの桶にみそのがせ。たかめれ手と
体もる所に珍しや其このうち。世の中の人とそへふ揖ふみん来ざりしに。

向への峪をつてひ。其なれに首を引て虫て来る人あり。弓矢かさ負
ひ太刀おびたり。猟人なるんと近づくとみれば夫守廉なりけり。ふ
これうつてうたとなーぬつと。早くもそれをみて女まづ泣て詞出ず。守
ど見我び且かるしげふ。我ハ別てより家とも絶を擲てかし山づ
きの麓乃里にさあまひ。狩泉を寿るて既に三月にあ及まり。今
日これに来り逢で夫婦の縁尽ざる事とただひに深く泣かくる。あ
しも河相の所為なるぞと問されて。身の憂きは飯倉の山にはた
さうつる我かもり。かかる変化そて其あまり洞へ足より一つゆきにつれて
岸の懐になんつれしと語る我。守廉ハおどろき我を具して逃ゆる
とも。彼邑の妖怪十里とはのびざるべし。退治せんでも佛神の力
をかりでは叶まし。本望をせんや。人多く催し。後の十九日よりに来
てうちてに出合。案内させ洞に斬入るべし。其あひだは氣色を我

察らまでぞ心をうゑてたくしみ。身を汚さん方仕さてあるべかり。
今世不ふ時うつべ変化いうてうさぐうん。我は早く立別まんと行を
放ちうて脇と指もして男も仏よりうち茶の上よりあり座しつくづくと女
房のさあとうて客迎ハ表へねもも孤て指せあを参てやんと。胡孫
より盤指とう出し皆水よ髪のをさみをうるは。浮屋しことむ
ふもうやうのゆたへし。姉育の山れ家り帰ふ木の系黄寝よ高
んうう府多よ変の高きれ変うらさあさんしんが者し宴会を
閑よして浅はしや変化の猿ようよりのうてあり。変ふまとうひしい
うれなうしうとれそうしく拝ひのけで女房等どうみをあげて笑
ひ見と酒宴の真とうう花雲も十分酔涼く抜けらまて伏あよ入
るあ行よのうう女房号よ変の化身を結うれで皆云我実の
計よ落さけもよくうる類なうされ祇酌よ立て眠うまの如り

よ遂て次へ出さん。浅便桶をうのひ酒宴の席へ出ふ如よう我くも怪
変ども言系禁制せ〻り〻ふ人傍ようてうるくうなりし。法分を
とんてなりうしげふ桶をそそようそひ。髪を巻さ也別うに脱うそ
一同よ笑をゆるされ指て変とあげしかりうこれ皆法人のあざむ巻ど
守蔵をなう。此れを断云ましまうみまて。島の音色霜雪よ
其時をうひりて十しまも存べし。故でるうろくしみやうよ母うよ
しとうの巡氏のうしあ拝べ離まて面べき今うて。ふよ拝ひしも
うよ上負うるに彼人のあうれそうよ故に化遠うに。まやよ面牧
みて。遂ふくんつうる厭こしぐ武衣諸寝の変破まアれどうまうれ
山洞の門梅しさんとうなれ祇ど。れ人のかうこあうぐくみをる
ふ映ふぶ。よの家より贈ゲ称の道へらう輿を踏よう横ぎう祇。て
とめへむこ君の家よあるこのことひうくさ祇しあり。遊と遂と


英雄百花譚巻之三
十

英雄百花譚巻之三
十一

遂に其計術に落ざるはなくして誑を守て内室を古法に咲く
言葉なし。飛雲も最後に刃をつりんと思意を立て発言を巧みに
て説いざる人とも。女の心にゆるされば方便の慾に走てさからふ形の。形によりて
くして取定めかたく。去ればまことびとは如何にしてふかくてぞ知られ。
又八千鈞の弩の一寸の筈を穿かねる理なるべし

白菓の下

都説守斎は妻女を先ひてより。岐蘇の谷峯につづきたる険所
をさぐり。飛弾信濃の山中を尋て行かれ三日六日足をとどめかろ
をかぎりと探られ。春は草をとて木どんをいたれ横に霰まれ花を
踏み。谷水の清きに夏をさかに涼まる梁らの岸を凌ぎては
空見つつよらは嵯の教る程ぞ今胡又れば。木曽の伏屋の行ぞし
ら撓める雲に路を塞がれ。又立かへる山をる落燃んとをふかせられ。

ここかしこをよばば近国の山深きは皆妖怪変化の所なるべけれ
ども。まして女が命ぜられて行くは君ねでなるべきなら。先近きより遠きに及
ぼんと。信濃一国の幽谷を捜て。元より屈強の家の子五三人を連
教ふして。鍋をたたみ苔に臥し。松をおて把火さし。巌のたたまる根茎
林叢原を極め。谷木の棲処山祇の社がそそまで驚ろして細尋ると
いへども。熊の鹿猪の窟のみは妖怪の住べき所もみへど。岸ようなる
賤の男に物語を仕かけて捜ね問へども。深き山中なればそれぞれ
きわもあやしき所もなかりるん通ふべき路のなかへ行ぐるをいまだ
見ぞけぬ所のとなりとい又が中にも知る者に麻きぬの袖まのく
すまふして。木客とて魂清な物てそれんなれ。朽木樹の葉を精
入て。円一ツふしてうどめれゆく。力ははなく知恵なし。人に陰されどもも害
はせど。時氣によりて現き時氣によりて滅を見をてそ其の化物ぞや

つべきなるべしとて。ある叔父がのらうしに。者より此ひとかたみの洞くいを。のあるて。春の比時天よりあらぬる後を現し。其後より株あるを掘せる洞穴儀よりあるいは紙をあるもあれども。ほとんどひとかたみ立こめてしづちとも其所にて実めがて。ほ紙をこれば恐しきてあるよ。ふかせぐるのハ。生の四をなるあるれやうふと会どるこれりさんぐも百年より一度い現るとしひ伝とるの四五十年このうさかのれが拘ぶ人てよりハ其洞をなるるのかし。住人の住所とヤ伝人伝ぱいふもあれを。より奥いなる霧ふくしてなく東西南北を別がく。樵夫山叟も入て成ぶるとて流る。守廉守よりけてもふれうをれどうなるとも紙ぶあるとのあんやと。把火先を照さを霧ふるまで勉強てふ入りてふれた方拾ちんどのらうをて里あるとふれめぐり出るのとなんぱるゆべきなこいまぶ。一日絶壁より紙なるをうとて。一つの怪しきぶ拘ってふれ。

大巌の上より生せるゞ長い七八尺もあるべし。色あく猿に似くて人面のごとく。人を見て笑ふ其数多のごく。音の章人に似ふ。多の附い上居額より出く人とうて踊れどさんぐ浅者どもふれ紙組をなんとる。守廉制して。ふれてを守伝る猫くとふ獣なり。孫千年ふしてるるとも。山猫のあるるとうがてぶぶを捕獲はかりれども。其力万鈞を挽るとなべかとふて勝べうず。我むうちう法より伝紙ねうとて。ひそうふ矢を放ひ。這斷が多府と額て。ふど射。巧まも上居を額へ抜て射ぶしふ。一数さけびて巌のうへうとうびかち矢を負ひなゞううげゆくとのゞすなこと孫とあつゆけど。多ひふうて。ふる吾陰より岩穴なりて血伝ひふうが。把火投こみうへいるとふ獣。伝まて動ゞなたゞ頻より踊て哀へうふ屋にとのうて。やゞて大石を抱て頭をおひしげべ。一数さけびて。其石をよ海のでくるの不上

なげやりて払ひたり。窟の内を見めぐらすに。奥のかたに岩のさし出たる上に太刀一腰あり。錆汚てぬれど希有のものなり。爲しもさぐりつけれど。鹿兎の引さかれくらひ殺したるあらしこれ有のとなり。ながら彼雞犬を見ぬれば主従ともに大いにおそれて。身も悚ぬ。此窟に宿せんと思ひしに。守て頭を掉てらは家をあらはし狒々へ忍ど雌雄ある獣なり。今殺せしをこれは雌なり。今一つ雄が帰り来るべしつれたる我くふせぐべし雑らあるべし。是を寛て暫く恐をなしてはどよくて出ぬ。我妻の事はおのれ宵をもとめれども益なし殺生して誤を失ひたると。我身にもひとつくて行もかへるべき道はなくて。餓れば里に出て人家に休息し。兎に角に露立の所奥へは入力もそなへるべきにもなければ。さすがの大丈夫も此座して天地例ならぬにおもひはかりもなく帰りなりて。浦島が寝覚の床にて。でめは草庵を結びしが。後は其後共の音つづけて

殿門に侍りし此依道人と呼るる翁あり。持すなる孔雀明王の法は白るを仏教を漢土に駕せざる以前より雪山仙人西域に起して是を伝へて今吾朝に伝流し。病を祈り禍を払ひ。抜苦与楽の験をあらはし給へば面相玄文の占卜へ法を説来りて遠くば信心を揮て護摩を求むる日日に絶ず此一七日は三種の密法を修せられて。まことに諸の人群集を。守兼遠例逍遥のなかに寺にいたり。道人日中の壇を下るを待うけて対面をのぞみしに。某はもとより西国の者なるが。此国にて妻女を妖怪に取れ給ひ。生死の程を究んため此山に棲こと三年を経たり。今年の期あるが故にをくだしたまひしより懇に指しを乞ひたり。道人守兼を近くよび面相し沈吟して云やう。時をまたず命を全くして待ましましぬ。且尊閣の生年年齢いかん。守兼云。我は今年の庵にて二十三歳なり。今年本人卒なるべし。道人すなはち卦をおく。数の言にいはく。其道を求めば得ざれども。留まれば

命特なりと。又問其怪いうるおそれなべしや。道人卦を設けて搖て云。大巡之門窺而無間。其密なること。うるて方るし。我多識を量ぶし守廉抱るし内玄関を通れ兵仏を舎て休息を。其日も未の刻さめう。

[illegible]の壇を系指文き中を。茶供人を挿ひ門外を弱う。未初のめぐり近習[illegible]形圍玄関を舁を人烏帽子しして立る威風骨梅小可の人をあるべし。後来へ石にうひとうて天蘗の女人かづうて宮殿を通りぬ大石乃人をおして何某い諫訪の一属小身なるものなり。ぬび諸なれど名のうど。先我を卦を結るべし。道人其支干方位を問。我いぬ國の舊家なるが。幼ゐて孤となり大君の家を寄食し生辰を記へど。俄ゐ甲子を以て是を充道人卦伏羲て仏祭そ云。天賜之之於謙有慶美人徳ありて陽くし必福つれども。寿命い海仏と若を久しくよろぐ仏を叶ざるなり。人の卦をあるべし。人大を收ひ乃人のとびいんどまれ

あらんなりと。我手来方事ことのめなんべし。道人の卦をあるるし。いうせん人男を着ぬくく通殺の逢ひ多し。思くい徳を換るあるんを。石にひの女人を相せむ乃人面相して命教ぞ。とと毎び其支干を問。面をあるるし答ふ道人卦を設けて云。四を愼て皆て差ひ。私く貞洋を先ぶ。必の木をあるる炎ふて伏ぬぶ中し手人の婢となりて其家を統ん。大名近侍を命じて金錢巻絹を[illegible]せて云。道人を煩乃一事あり。我結へ卦のでくるん仏を呉まとども。近は一つの紅せざる紅あり。今日を毫の法命を統て此紅を行らんとなるなり。乃人云やそ晡時の壇に登まで。俱を法命ふ[illegible]て行り如へて菓を供じて待さる。洗を壇を中を讀経の宮巻れるる。香をひわりて。南無十方の諸天。此一炷の香。四海安静を穀豊登。之の教昭明を聖れ君敬多れ。一炷捧て。十方施を後徳を気

扳若与樂。又一炷を燒て。今此甲子の貴人如意滿足なしたまへと願ひ祈り求らる。其後の衆議を指て其枝の葉を求む。貴人の議六十三の年と云

女房の拵る九十四議と云

あるなりてはのみのりあり人いまゝ色の命有てきけ
百人壇を下て善教を法して年ゝに貴人頂戴して收び納なりぬ下
向ある。百人徒弟と命じて玄関に送りしむ。守護い歴この武家系
諸とこゝにて彼が帰るを待て道人と相むきてあまべ問成陽て立
かゝれ今ふとふ窺べ。大名の後ふ流ひ出る姫人をこゝに笑る我女房
なり。大名驚き変化あるべしと思ふ大名の仕業なりなり。誰もあれ眼あ
の然敵脱さとあ法よりの行ひと定めて為て絲の一よ三筋

殊れおく。多へやくあのひ申してつねてくるほとやくたのよ
うて扳りとでむ。償て為れ者のよふにむ間もなく為この矢とりよ
くくて噛でむ。とくとくに射る矢と墨く拂のけ一つも身ゝあるう
ど。守護着忙扳設て切てくるとやくきとくとくむく眼のひろ。卯ゝ鈎
れくゝへどに居をくまりて動きるどや白柔いろうどうといくくれ是
もゝ神色あると言ふなくてあるひりる。大名然の相と現し係女房ふ会ふ
く還ゝ職ゝ就ざる。女ゝく仕なべ化ゝ者ゝ放ちゝ人ゝ。ゝくゝ一生
ゝとあるべくくくひあて墨く宿祈ゝ浴し。大徳寺ゝ為ゝ。女
ゝ引に入れ参拘ゝ為ゝとひくく文の家人中ゝ死せて見ゝやしいふ甚ま
ひゝさゝと退てゆく守護が面ゝ拘ぐめりふふ家のゆゝ大石空ゝうゝ
と落る地ひきゝ肝ゝ引ゝ行て庭のふゝてゝう。起ゝうゝ早く教ゝ
ゝど俗人の用ゝも流の迫まで行ゝとゝゝ人ゝとゝゝ。守護其

悪い者四に一宿して氣を養い孫娘の業と知る。因て之なげく女房と
云へども紙幣金子ども是も真の白菊なるべもなるべきことなり
人ふもかうして心熱ひするも理りなるべくて白菊へくべまる逢なげく
言葉なく別れ乃ちなげく之は此変化いつる徳ありて名知識の后ゆも
悪人の相なく凡人なるべとあれば神の化現ことあり。守どの
力量弓矢も近よることあるべ。我女の身として計按のかりべきゆ
なし。彼まさ紙にて人をば殺ちんと言へ。身を人汚さどんべ此蟇の後段
をもとうはるゆひて結句教さるべ。後語と体人来拙よ
ひて是をの不是と作なげくべ。龍雲も刻をでやふ。身ふ近く
寄眉をなさば我こだ也ひ。さまだこそ你が真ぶを張て
奉べきゆもあるべ。白系洞ふ降てう女ぐに立生
じまて一緒のゆともにたりれば。我通力を弱きて女ぐ心知ぎう

遠ひて者をこげなんと悟るゆ。うなく。女ぐに向ひて我
出身と流てそ。我い神世ひ不ひ樓て已ふ二ふ。者し大公祇の神ふ
説さとして天孫小浜ひ。邦守俊の神乃教ゆ入るべうしとそ。分の
不徳をかうして接近し。我ふまず我居ひ。
乃ふ霧をふして人間ふ入せてるべ。れくりて世の事ふあづ
汝ば我を隠ようとゆて勅使のてるし。皇孫に射して反心な
りしべ其の孫の事い答ふあづうべ。むうう敢多の女を抜て来り
乃にひうれど。七人の国ぬふ石れ栗い天蓍氏の賜ふ者の産う。
婦女小東ふ来ふ来ふあべきを。色着のゆふれて久しく洞ふ逆
むりいるそ。孫て遠ひ入とべきゆ多くい命教うりべ。者ふ山
四山下れ里ふ牲と名ぶけて少女を使ひ。ゆ我居ふるゆ。
多くい是村安なしどゆ。ゆも敬せざるう角拙ふ其事ふるう。右い

我も為よ形をイ現してよれ男となる。女だてい出るとのこと
ろーっぐ。我徳をいづれて形に表ろとれつる五下よ卑きまげるれ
て。里に出て遊べ時かりでは容儀をくどと。足をとうてねあがろ。
寒も寒苦困の人なりしと。白系をこで色多くの女房弱人にもたろ
なんう。此よ本心に病せ守ぐ。明もど道人よってあこひを。道翁
教て大ぶぐろ。今日芸妓の相をこるくきのて大変ど眉ひろ
け者好べ。守ぐこ明日今日いんど相の変どるるかれぐく
なるる。道人こず教もよ其少をさそこぐ。再び著を抽き卦を
出てこ。鶏水を焼て彼面風水を解のて。足寿風水を曇ら。足
下夫婦完聚の占文なる。怪しもべしくく。眼を閉て祚と出ず刹
ぐりかして眼を開て守ぐふさていて。ぬる系教あり。心懐ぬる
汗甲ろしなんど下酒をわて滅をべき機あり。係ぐ妻の丁酉八尖の運

甲子八金の運なり。微尖をこて大金成済を一生の泥こに足大数の紛ぬ
ゆて其完業を消却すんとする所もんぐ。ぬ人貴実ありたやとく活い
ぐ。この紛よ富ある。あと活くぬるる仕完業ぬる事祚通もみ。ぬ
のはよ教て世を流人ろ所る法金に系ぐこる変化の悪行貫盈をこ
こぐ。此縁をこげざれべつまもこ示時もべ。今卦の変ぐこる成
ぬて之祚べ今々系縁を通ることあるる。足又教毒の法の庭弱あるる不
可思議の妙をちこぐ。尖姫再金の後足をいそ広こ狭こもこ
こんべ再び祚々足下のみよ法力を施さん守ぐこ。係系其金のりべき。
我よ尖の身こて彼を落すこあさんぐ。ふ言んや女こやべ今月
志をろうこる。弱々の女の身べをきてあ。ぐ道人ぬこ張祚てこ。ち
壇ふをう。髪を抜下寶鈔を把て口中呪詞を念じ。檄を香焼内み
焼大喝一変こ。忽然こて座中昏黒一陣の怪風起る。守ぐ壇辺

に俯伏して見れどもしるし所なし。呉亐道人の教へて焼雷公今日
は山精を撃べし。雷公の難んずるは彼に勝ことあたはざるが故ならん。
今日大数到来。撃ば必ず誅んと言下忽ち壇上より閃電起て一陣の
霹靂雲間に震ふ。漸く庭中晴て日気をみる。吾人守どもに教て
云、雷の教せし方格をおこなはゞ、必ず験あらん。守ども一躍し急に従
者を具して峻嶮を凌ぎ、雷の落着るところをさしてゆく程に、或
を霧立のぼりし谷間につらなり、暗けれども出ざる者のあるべき所あり。牢
ある所は沙ゞ波やうに、傍に石もちらぬ木本多の花ども咲つゞくに景色
ゆるがし。星飛雲が岩に謡女と優艶をこらしたるの音なくしてやみて下
まで数多の山路をこえて、白菜数人の女房と共に作れ野れ、紅
逢て再会の悦び身に及べりぬ。おいでせしと向べ、白菜はなはだ其の涙を
ちらし。今朝雨なれ空に鳴神の物おそろしく、洞の上に落りし変

化を撃殺せし国てけれく里をさして出るにぞ、つぎに霧はれてはたは
出さりしに、守ども大に悦び女ども白菜ともに家人を分ちて里に送
屋り。其身は山深く入り往に、蒼いる人ざりし山の中腹に巌窟
あり。其内に石をたゝみ、木を横たへて鉄の結構あり。正殿雷の為に砕ら
れしこそ変化のしるし見えて、其長一丈あまりの異形の獣、雷火に焼き
て褥の上に死せり。即ち首級切てとりて、せる細に入て、帰るまじ、いざ出なと
り彼まして、廻廊の出た家ばかりし。一画房隔すれて開けるりければ
女の鉄局せし所なり。正面の窓の下に銀もて飾れる紐一振あり。鏈せられ
を陽の形なり。鏈をぬきてみれば、今朝のままふるひたる鈕のかぎりすえつゞ
や婢が岩穴にて得たりし紐によく似たり。又は怪異と睨眈するやありけん。
その絹布財器数多あれども、これをとらず。洞の内に火を放ちて焼つく
して立帰て、国司にまかりて始終を語て虚病せし分説をなされ。国司も

布代の事よろひて人まで沒しまとりう白雨あるとゆてよう病と附し
く悩こりうをこ依道人の霊符をかりて平癒せりまま臥寝之の床よい
くうて道人よ謝し布百疋を進をゆ道人今や世財を受て用ゐーこと一
匹を留めて服用こ。尚示していて。世れ人陰陽の理ようやく落て求
給て服ひ。完家相得ざれど其薬用りんぞ。ぞて逆まこぐ花咲て新よらう
し。是天地の消息なるゆ。其門よりゆーの座速強弱幸不幸有尊門の貞
堅なるも洞よ入て後。日月よ死の一字をゆるをふりこ。是即妖術と魅
せこ紙るなり。実如聴て弘教服して退く。是ようを本寺山中霧のよさの
まなく出ぬきあり。ゆえ。堪ま樓人賜の男女を仮どとてそこれし。女を実ひ
ある本寺の住坂古紙より妻兎の名あるよ。馬兎とよ不ハ其有流者と
宿せこ。兎角のあるよ月日よとて。早くも相の住滅て住中の事「嘆」
坂つまあ。角のやさこ月の陰那を熟ろひ出ろて。序変化の寝不ちく
沒せこ紙。婢妻の孫よ仕こ。ゆの会よろうて際こ。天と貞操
に聚る所あり。依身の瘕淹古紙なるのこうみいさどをるづたのこ。
やこ。徒地の者を縊の後よ殺て。角ノ弓をとりて見こ紙射て。事
なてこ。眼をのこさけこうる。其所後世猿掛乃山半こどりよしでこ云
て西国のこなんぞそれとして老いちづすと語りつげこうとか。

古今奇談雜話野話第三卷終